四

賀茂川と高野側が合流する今出川橋まで、坂崎磐音と東源之丞は黙々と歩いてきた。

その間にも源之丞は何度も思い吐息をついた。そして、意を決したように言い出した。

「坂崎、そなたにも奈緒どのにも相済まぬことをした」

「東様、あの金は元々西国屋治太夫に工面させたものにございます。悪銭身につかず、これで気持ちの整理がつきました」

「とは申せ、どうするな」

「まずは朝霧楼の楼主どのに会い、奈緒どのに会えないまでも元気でいるかどうを確かめ、その後のことはまた考えます」

「そうか」

と頷く東源之丞に、

「東様、明朝は大阪へお発ちください。東様には国許で御用が待っております」

しばらく沈黙のままに鴨川の瀬音を聞いて歩いていた源之丞が、

「年甲斐もなくつまらぬところに誘った罪滅ぼしじゃ。これからわしも朝霧楼に行って、一緒に頭を下げよう」

「これからでございますか」

「遊里ではまだ宵の口じゃ」

二人は足を速めた。

鴨川の左岸を下った二人は、四条大橋を渡り、東西に走る四条通りを進むと、大宮通りの角で南に曲がった。さらに西本願寺の辻を花屋町通りに曲がれば、遊里に突き当たる。

島原遊郭に近付くと弦楽の調べが通りに流れてきた。

明の妓院の制を移したものが島原遊郭の基になり、後年、江戸に吉原ができるとき、島原の制度や習わしがそっくり模されたという。

東口に立つと真ん中に大通りが東西に抜け、その左右に三筋の小路が交差していた。

左手には上之町、太夫町、揚屋町と奥へ続き、右手は中之町、中堂町、下之町と小路が交差しているせいで、俗に三筋町と呼ばれていた。

吉原の名物となった張り見世、花魁道中、夜見世、紋尾なども、この京の習わしが始まりで吉原に伝わったものだ。

ちなみに島原の遊女の最高位の太夫を座敷に呼ぶとき、揚げ代銀七十六匁、貰い引きに二十四匁がかかった。この貰い引きというのは、揚屋に払う代金であった。

揚屋の朝霧楼は、太夫町の角、上之町と向き合うように堂々とあった。

東源之丞は、玄関に遣り手を呼び出すと、西本願寺の納所の親恵の手紙を出し、

「野暮用じゃ。すまぬが楼主どのに取り次いでもらいえぬか」

と懐に二朱を落とし込んだ。

遣り手はじろじろと二人の風采を見ていたが、手紙に目を落として確かめると、

「書き入れ時分どっせ」

と嫌味を一つ残して中に消えた。しばらく二人は待たされた。

刻限は四つ前であろう。

酒と脂粉の香りが弦楽の調べに載って通りまで流れてきた。

磐音は、このような里に奈緒がいると思うと胸が締め付けられた。だが、今の磐音はなんの役にも発たない木偶の坊に等しい。

「お西さんの親恵様の紹介やおよって、断りもできんやろと、旦那はんも女将はんもお待ちだす。あんたら、こっちに来なはれ。そう長居はあきまへんえ」

遣り手は釘を刺すと二人を細い路地奥へと連れ込み、勝手口から台所に入れた。板の間では、お豆さんとも呼ばれる童女が擂り鉢で胡麻を擂らされていた。

その板の間の奥に帳場が続いて、磐音たちはそこへ招じ入れられた。

「ご商売の刻限に相済まぬ」

「親恵様の仲介や、断るわけにもいきまへんよってな」

福々しい顔の下に厚みのある胸の女将およしが、煙管に刻みを詰めながら言った。

「関前藩のご家中やそうな。どないな用事だすな」

女将とは反対に小柄な主の九兵衛が二人に訊いた。

「つい最近のことじゃが、長門の赤間関から奈緒と申す女が身売りしてきたと思うが、確かな」

東源之丞が訊いた。

「赤間関から女がな……」

と応じた九兵衛が、

「おまえ様方とどんな関わりがございますのんや」

と訊いた。

「ここに控える坂崎磐音の許婚にござってな。いや、これにはいささかの仔細がござる……」

源之城尾が早口で仔細を述べ立てた。

「なにっ！このお方は、身売りされた許婚を長崎、小倉、赤間と追ってこられましたんか」

女将のおよしが呆れたように言った。

「さよう。できれば、身請けしたく思うてな」

「身請けと申されても、そないに転売されたら、えろう高くなってますやろ」

と二人の懐具合を見透かしたようにおよしが続けた。

「主どの、女将どの、奈緒どのはこちらにご厄介になっておりましょうか」

磐音が訊いた。

「それを聞いてどうなさる気や」

「元気なれば、それがし、こちらを立ち去り、金の工面を考えとうございます。奈緒どのはこちらにおるのでございますか」

磐音は揚屋の主夫婦を見据えた。

ふうーっ

とおよしは煙管を吐き出した。

「一日違いやったな」

「どういうことでござるか」

源之丞が急き込んで訊いた。

「確かにな、赤間関から男衆に連れられて奈緒という女がうちに来ましたがな。一目で気に入りましたえ。あれは天神、太夫になる上玉だしたわ。そんでうちではえろう高い買い物をしましたで」

磐音が九兵衛に訊いた。

「いくらでございましたか」

「八百両や」

「は、八百両……」

東源之丞が呻いた。

「そやけどな、偶然のこっちゃ、さる侍屋敷のお重役が帳場に座っていた奈緒を見られてな、一目で気に入りましたんや。金はいくらでも出す。それがしが身請けするとやいのやいの言われましてな、強引に連れて行かれましたんや」

「どちらの藩にござる」

東源之丞の言葉をおよしが煙管で制し、

「あほなことを。女の売り先なんぞ言えますかいな」

と躱した。

「ならば、いくらでお売りなされた」

「うちにはたったの数晩しかおらんやってな。座敷にでたわけでもなし、千両にございました」

源之丞が声を出して呻いた。

八百が千両に化けたと言った。

「主どの、女将どの、この通りにござる。身売りされた先のお名前を空かしてもらう分けには参りませぬか」

東源之丞が、がばっと畳に頭を擦りつけると頼み込んだ。

「商いには約束事がおますんや。これおを破ったら、かような商いは立ちゆきまへん」

九兵衛が引導を渡すように言った。

「どうにもならぬか」

なおも頭を擦りつける源之丞の背に手をかけた磐音は、

「東様、もうようございます。無理な願いにございました」

「坂崎」

と頭をあげ、視線を向けた源之丞に、

「参りましょう」

と磐音は立ち上がった。

「お侍、いったん身売りされた女を請け出すのんは、至難の業にございます。まして奈緒は千人に一人、や、万人の一人の上玉や。この世界が手放すもんだすか。諦めなはれ、分相応の女を見付けなされ」

主の言葉に源之丞が、

「おのれ！おとなしく頭を下げておれば、さような侮蔑で吐きおって」

と憤るのを、磐音は諭すように台所から裏口へと連れ出した。すると擂り鉢で胡麻を擂っていたお豆さんが二人を気の毒そうに見た。

東口を出た二人の背に晩秋の夜風が吹き付けた。

柳の枝が寂しげに揺れていた。

「くそっ！小馬鹿にしくさって！」

源之丞が吐き捨てた。

「遊里の者は情がないな、坂崎」

「いえ、遊里の者だけではありませんよ」

「どういうことだ」

「主夫婦はわれらが行くことを承知していたのです」

「そのようなことがあろうか」

「では、なぜ、われらが豊後関前藩の者と知っていたのです。東様、藩名は申されませんでしたし、親恵様の紹介状にも藩名の儀は御容赦くださいと再三願われました。

「とするとだれが」

「ですから、親恵様が、朝霧楼にわれらが訪ねることを知らされたのですよ」

「なんだと、あの糞坊主が……」

「仕方ありませぬ。こちらは金のあてもなく訪ねていっただけですから」

「坂崎、昔、大阪でな、京の者を信用するとばば見るでと忠告されたことが合った。ほんとのことじゃな」

呆れたように言い、源之丞が虚脱した。

「西本願寺に乗り込んでも無駄かな」

「無駄です。旅籠に戻りましょう」

二人が四条河原町へと足を向けたとき、

「すいまへん」

という幼い声が背でした。振り向くと、朝霧楼の台所で擂り鉢を擂っていたお豆さんが立っていた。

「なにか用事か」

「坂崎磐音様にございますか」

「聞いておったか」

お豆さんは、首を横に振った。

「奈緒様からお聞きしましたんどす」

と応えた童女は懐から舞扇を出して広げた。

常夜灯の洩れる明かりに、秋景色の山寺の山門の下に若侍と少女が立っている風景が描かれていた。

若侍の手には閼伽桶があり、少女は黄菊を胸に携えていた。

石段の左右の楓や紅葉は、色鮮やかな秋の色に彩られていた。そして、二人の回りの秋茜が飛んでいた。

豊後関前藩の泰然寺に彼岸のお参りにでかけたときの、磐音と奈緒の姿だ。

飛べ飛べや　古里のそら　秋茜

「この方は、坂崎様やな」

「いかにも。それがしの名を奈緒どのが教えたか」

「あい。今日の昼下がり、慌しゅうお発ちになるまえに、世話になったとくれはりましたんや」

「なにっ！奈緒どのは今日之昼まで朝霧楼におったのか」

頷く童女に源之丞が訊いた。

「西本願寺の親恵どのが見えられた、そのあとのことだな」

「あい」

「くそっ」

童女は磐音に舞扇を渡すと、

「奈緒様が売られたんは、京のお屋敷と違いますのんや。加賀金沢の遊郭に売られるために、番頭さんに連れられていかれましたんや。妓楼の名は知りまへん」

と磐音に囁いた。

「ありがたい、たれぞが自分を追っておられることを知っておられます」

「わ、分かった」

磐音はお豆さんの手に、

「これは礼じゃ。たれにも言うでないぞ」

と二分を握らせた。

「おおきに」

お豆さんが素直に頭を下げて受け取り、磐音に訊いた。

「加賀に行かれますのんか」

「参る」

「朝霧楼のお豆がよろしゅうとお伝え下さい」

「承知した」

童女は、奈緒には朋輩の連れがあったことを言い忘れたと思いながら、遊里の門へと走っていった。

京の七口の一つ、大原口から若狭に通じる若狭街道、別称鯖街道を磐音が歩み出したとき、明け六つを回っていた。

旅籠の蔦屋に戻った磐音と源之丞は、台所に無理を言って酒を部屋に上げてもらった。

明日には源之丞は摂津大阪へ、さらには国表の関前へと旅立っていく。

加賀の金沢へ向かう磐音とは、別れとなる。

二人は酒を酌み交わして名残りを惜しみ、酔った源之丞が眠りに就いた後、磐音は父親の正睦宛に手紙を認めた。それには国家老昇進の祝いの言葉を申し述べるとともに、

＜……此度の国家老昇進は、唯唯ご苦労のみ多かりし＞

とその苦労を労いつつも、なんの助勢もできぬ不甲斐ない身を詫びた。

あれやこれやで、一睡もしないままに朝を迎え、慌ただしく源之丞と別れることになった。

昨夜も歩いた高野川沿いの道を詩仙堂から八瀬へとひたすら向かう。

古より若狭から京に一塩者の魚が一昼夜かけて運ばれてきたそうな。

磐音は、ただひたすら鯖街道を京に向かう魚売りの男女とすれ違いながら。大原の里へ差しかかった。

朝まだきの大原の里では、稲の刈り入れを終えた田圃の畦を、頭に薪をのせた女たちが往来していた。

酒気は抜け、空腹を覚えた。

朝餉を食せぬままに旅籠を出ていた。どこぞでうどんなり討ってはおらぬかと街道の左右を見回しながら進んだ。が、刻限が早いせいか、それらしき茶店も飯屋もない。

古知谷阿弥陀寺を過ぎるともはや民家すらない。原を空かせて歩くしかないかと諦めかけた時、天秤棒の両端に飯台を提げた若狭の女魚売りが、腰で拍子をとりながら山道を下ってきた。

「すまぬ」

と声をかけた磐音に、なんぞ食べるものを持っておらぬかと訊いてみた。

女は、磐音の顔をじっと見た。

「いや、金はある」

懐の財布を取り出した。

「鯖鮓でええか」

「おお、ありがたい」

女が飯台を下ろして、荷から竹皮に包んだ鯖の棒鮓を出してくれた。

磐音が一朱銀を出すと二本の棒鮓をくれた。

女に礼を述べて先を進んだ磐音は谷川のせせらぎを見付け、腰を下ろした。一竿釣りで上げた真鯖を酢飯に合わせた棒鮓を、小柄で切り分けて食した。

「おおっ、これは美味だぞ」

独りごちた磐音は無心に二本の棒鮓を平らげて、谷川の水を飲んで一息ついた。

（奈緒もこの山道を通ったのであろうか）

そんなことを考えながら、再び街道を歩き出した。

鯖街道には山城国から近江国に入ったあたりに花折峠がある。

磐音が峠の頂に差しかかったのは、昼を過ぎた刻限だ。

一息入れようと足を止めたとき、後方から山駕籠を囲むようにして浪人や遊び人たちが峠を走り登ってくると、

「だんな、こやつやおへんか」

と叫んだ。

山駕籠が止まり、簾を上げた駕籠から顔を覗かせたのは、島原遊郭の朝霧楼の主の九兵衛だ。

「かなわんな」

九兵衛がいきなりそう言った。

「なんぞ迷惑をかけたか」

「うちの子供衆に金なんぞ握らせて話を聞きだすやて、おまえさんも隅におけまへんで」

お豆さんの行動を見ていた者がいたらしい。

「まさか、いたいけな少女に折檻などしたわけではあるまいな」

「遊里では女は宝や、傷はつけまへん。代わりに折檻部屋に押し込めて、当分飯は抜きや」

「なんと……」

磐音の行動が少女を苦しめていた。

「なんぞ用事か」

「用事とは知れたこと。女の売り先をあっちこっちと回られては、わての名が廃りますのんや」

「京に引き返せと申すか」

「いや、面倒ですよって、あんさんには死んでもらいまひょ」

島原の揚屋の主は平然と言ってのけた。

同行してきた餓狼のような浪人たちが磐音を囲むと剣屋長脇差を抜いた。

磐音はゆっくりと視線を巡らせた。

浪人が余人に渡世人が三人だ。

山駕籠を担いできた駕籠かきたちは戦いの輪の外に出て、見物に回った。

その前に立った九兵衛が、

「往来の人間がおらんうちに早々に殺っとくれやす」

と非常にも命じた。

磐音は胸の底から湧き上がる憤怒の情を抑え、

「今日のそれがしはちと腹の虫のいどころが悪い。死にたいものは遠慮はいらぬ、参られよ」

と静かに言いかけると備前包平二尺七寸を抜いた。

七人の刺客が思いの気合い声を上げて、磐音を威嚇した。

磐音は、下段斜めにつけた切っ先を正面の浪人に向けた。

羊羹色の古びた羽織の浪人剣客は、正眼の剣先を鶺鴒の尾のように上下させて間合いを取っている。

「ええいっ！」

殺し屋稼業を繰り返してきたらしい剣客が、正眼の剣を水平に寝かせると突きの構えに変じさせ、磐音に突進してきた。

磐音は襲来する切っ先を腰を軽く沈めて寸余に躱すと、下段の剣をすり上げていた。

豪刀が剣客の腰を深々と割った。

げええっ

絶叫が花折峠に響いたとき、磐音はすり上げた包平の切っ先を虚空で反転させつつ、右手の群れに飛び込んだ。

「相手は一人やで！」

九兵衛が叫び声を上げ、

「殺せ！」

「後ろに回り込め！」

という悲鳴にも似た言葉が峠に響いた。

だが、二尺七寸の剛健が一閃また一閃するたびに、刺客が一人二人と斃れていった。

二人がかろうじて包平の切っ先から、いや、峠から逃れて助かった。

五人の刺客が呻き苦しむ中、ふいに起こった旋風はふいにやんだ。

磐音が九兵衛を見た。

「お、おまえ様は……」

「奈緒どのは、加賀金沢の遊郭に売られたそうじゃな」

九兵衛が小さく頷いた。

「妓楼はどこかな」

「番頭に値の高いところに売るように命じてあるんや」

九兵衛はまだ売り先の遊郭は決まっていないと答えた。

「朝霧楼の主どの、そなたの命、しばし預けておく。もし、あのお豆さんに手出しをいたすようなことがあれば、そなたの素っ首はその小さな体についておらぬと思え」

九兵衛ががくがくと顔を振った。

磐音は包平を一閃させて血振りをくれると鞘に納めた。